

日本学術振興会

## ナイロビ研究連絡センター・ニュース

1998年4月 第1号

### 他人事としてのアフリカ、我が事としてのアフリカ

湖中真哉（静岡県立大学国際関係学部）

文化人類学は異文化理解の学であると言われる。我々と彼らは同じ人間である。しかし、何かが違う。何が違うのか。以前は、こうした差異は人種という生物学的差異に由来するものと考えられた。しかし、このような考え方は近年大きく後退した。では、今日我々と彼らを隔てているものはなにか。それは「文化」である。そして、この文化の違いを理解しさえすれば、彼らの生活も我々と同じように理解できる。文化人類学の一般的な前提というのはこのようなものであろう。偏見を捨てて、異文化にも素晴らしいところがあることを理解しようではないか。異なる文化を理解しさえすれば、我々はハッピーエンドに至れるというわけである。

しかし、ある文化を「異文化」として見る作業は、そもそも対象化の作業をその前提として含んでいる。ある文化を異文化として記述した瞬間から、我々はその文化を自分のこととして語ることはできなくなる。つまり、異文化理解という問いをたてた瞬間に、異境で彼が経験するすべては、「他人事」となる。

ところで、最近、米国で出版された Keith B. Richburg の *Out of America: A Black Man Confronts Africa*, Basic Books, 1997 という本がケニアにも輸入され、ナイロビの本屋で山積みになっている。私はこの書をいきつけのナイロビの書店で見つけ、帰ってきてホテルで食べるようにして読んだ。まだ全部読み終わっていないわけではないので、以下は大雑把な理解であるが、簡単に紹介したい。

著者はワシントンポスト誌のアフリカ特派員で、アフロアメリカンである。ナイロビに拠点を構え、ルワンダとソマリアの政変があった三年間、ケニアに滞在した。彼は、アメリカ社会のなかで、差別を受け、あくまで異人として扱われる体験のため、外国の特派員になったという。そして台湾や香港で特派員として彼が滞在した時には、黒人が黒い悪魔と呼ばれるのに対して、白人が白い悪魔と呼ばれるのを聞いて、アメリカ社会とは違った位置づけが東洋の社会ではなされていることを感じる。

彼はアフリカに来るまでは、黒人運動の指導者達が言うように、アフリカではアメリカと違っ

て黒人が威厳をもって暮らしていると想像していた。ところが実際に滞在してみると、アフリカで、彼は虐殺、飢饉、腐敗、不正、暴力、犯罪が横行していることを知る。彼はルワンダ、ソマリアの政変の渦中で取材を取行する。タンザニアで虐殺された幼児の死体が流れていく川べりで、彼は自らの黒い肌を引きはがしたくなったと言う。ナイロビのスラムで暴徒が、少年の腕を笑いながら切り落としている写真を見て、彼は、どうして私がこの人々を祖先とあおぎ、理解することができようかと述べる。ナイロビの一角で、同じ肌の色の人々に囲まれているにも関わらず、彼は孤独に悩まされる。序章を結ぶ言葉は衝撃的である。「私は、神が私の祖先に（奴隷としてアメリカに連れて来られた結果）、アフリカを脱出させてくれたことを感謝する。つまり、私をアメリカ人であらせられたことを感謝する。」三年間のアフリカ滞在の結果、彼はアフロアメリカンとしてではなく、アメリカンとして自己を再定義する。

リッチバーグの記述の中には、あまりにも暗い面ばかりを捉えていると思わざるを得ないところがあり、少なくとも客観的なアフリカの記述として、私はこの著者の記述に全面的に賛同するものではない。しかし、記述の客観性という観点から本書を断罪するのはそもそもお門違いである。彼はジャーナリストだが、決してジャーナリストとして語っているのではない。彼がしているのは自己のアイデンティティの探求であり、それは告白に近い性格をもっている。昨年10月末頃から、ケニアの新聞Nation誌のインターネット版(<http://www.africaonline.com/nation/index.html>)では、アフリカ人とアフロアメリカンに関する論争が投書欄で続いているが、おそらく本書がこの論争の引き金となっているのだろう。アメリカに留学したケニアの学生、ケニアに滞在したアメリカの大学教授、様々な人々が議論に加わっている。

冒頭の問題に戻って考えてみよう。彼は、アフリカ出自のアイデンティティを捨てたのだから、彼は「他人事」としてアフリカを語っているに過ぎない。このように言う人もいるかもしれない。しかし、このように言う人は、彼にとって最初からアフリカは「我が事」であったということがわかっていない。もし、日本人であるあなたがルワンダの虐殺の渦中にいたとして、あなたはどどう感じるだろうか。「この人達」は、なんて恐ろしいことをするのだろうか、と感じるのではないだろうか。その時すでにあなたは「他人事」として虐殺者を語っているに過ぎない。しかし、リッチバーグにとってはそうではない。ルワンダの暴徒が行った虐殺は、すなわち彼が行った虐殺なのだ。虐殺者=自己だと考えているからこそ、彼は自己の定義を苦悩するに至るのである。もともと彼にとってアフリカで起こった現実、すべて「他人事」ではなく、我が事だったのである。だからこそ、彼は苦悩し、自己の再定義を迫られる。

おそらく本書を出版することで、リッチバーグはアフロアメリカンのコミュニティから指弾されることを覚悟していたに違いない。彼は、マルコム X なら、私のことを「(白人に)洗脳された黒人」と呼ぶかもしれないと記しており、自らが非難されることはすべて覚悟のうえである。アフリカを理想とするアフロ=アメリカンの運動の大勢にあえて逆らって、このような書物を記すには、大変な勇気が必要に違いない。では、そのような危険をあえて犯してまでして、なぜ、リッチバーグはこのような書物を記したのだろうか。私は、それは彼のアフリカとアフロアメリカンに対する逆説的な愛情であると思われてならない。徹底したアフリカ非難の論調にも関わらず、逆にこの書から私が感じるのはリッチバーグのアフリカに対する強いこだわりであり、あく

まで我が事としてひきうけ、考えぬこうとする姿勢である。

このような彼の認識は、他人事として「異文化」を語ることを商売とする文化人類学者の職業病にメスを入れるのに役立つだろう。ナイロビで（そして、しばしばこの学振のオフィスで）、私を含めて文化人類学者はアフリカの様々な文化の魅力とユニークさを語ってきた。確かに、我々は、我々と異なった文化に強く魅せられてきたのだ。しかし、そのような対象化が進めば進むほど、アフリカで起こるいっさいの出来事はますます「他人事」でしかなくなる。他人事である以上、その他人の文化をショーケースのなかに入れ、無責任にもちあげて称揚することはいともたやすい作業である。私がリッチバーグに感じるのは、文化人類学者が職業的に語りがちな、偽善にみちたアフリカの賛美とはまったく違った認識である。リッチバーグはアフリカを徹底して非難しているが、それは「我が事」としての愛情と裏腹である。それに対し、人類学者は愛情と理解を装いアフリカの文化を賛美してやまないが、その奥底にあるのは実はアフリカに対する根深い軽蔑に過ぎないのではないか。両者の姿勢は好対照を成す。

ナイロビに、私達が車の修理でいつも世話になっている自動車修理工がいる。日本人だが、ケニアの国籍を所得され、ケニア人と結婚されて、もう何年も住んでおられる。彼と世間話をしていて、そのほとんどがケニアの国に対する愚痴であるにも関わらず、かえってケニアへの強い愛情を感じる。その愛情は、ケニアのユニークな文化を嬉しそうに語る文化人類学者などよりはるかに強いに違いない。リッチバーグと彼の姿勢は似ている。我が事としてケニアの現実を感じているのだ。「湖中さん。こういうケニアの現状を一体どうしたらいいんでしょう？」 アフリカ研究者という肩書きで飯を食っているくせに、それを聞かれる度に、答えに窮してしまう自分がいつも情けない。

では、文化人類学は、異文化理解という前提を捨ててどこかに行けるのだろうか。残念ながら、その見通しをここで語る能力は今の私にはない。文化人類学は異文化理解を続けてきたし、これからも続けていくであろう。もちろん、日に日に世界が一体化していく今日、それは建前以上に必要なことなのだ。私も当面はそれを続けてゆくより他ない。しかし、異文化のショーケースを壊して、ハッピーエンドの先を考えるべき状況に、文化人類学は否応なしに立たされているように思われてならない。

## センター・ニュース（3-4月）

### 行事

#### 3月

- 21日 足達太郎駐在員着任
- 22日 新旧駐在員歓迎・送別会（センター）
- 27日 職員慰労会（Sagret Hotel）
- 31日 荻ノ迫善六駐在員離任

#### 4月

- 25日 第127回学振セミナー「アカシアの生存戦略—標高差によるアカシアの群落様相」

話し手・荻ノ迫善六氏 参加者 20 名 (センター)

### 研究者往来

羽佐田勝美氏(神戸大学大学院国際協力研究科)96年6月よりケニア滞在。98年3月までWestern  
州 Busia 県にて農村金融(インフォーマル・ファイナンス)に関する調査。5月帰国予定。

国松 豊氏(京都大学霊長類研究所)97年12月21日より化石霊長類調査のためケニア滞在。

98年4月、標本調査のためウガンダ訪問。5月上旬帰国予定。

湖中真哉氏(静岡県立大学国際関係学部)98年1月15日~4月6日ケニア滞在。Rift Valley 州  
Samburu 県にてケニア中北部の家畜市の価格形成機構に関する文化人類学的研究。

曾我 亨氏(弘前大学人文学部)98年1月17日~3月21日ケニア滞在。Eastern 州 Marsabit 県  
にてラクダ牧畜民ガブラの人類学的調査。

### 第127回学振セミナー

日時:98年4月25日午後2時

話題:「アカシアの生存戦略—標高差によるアカシアの群落様相」

話し手:荻ノ迫善六氏(前学振駐在員)

要旨:

アフリカにはアカシアは129種類あるといわれている。そのうちの53種が東アフリカに存在し、乾燥ないしは半乾燥地のサバンナにおける燃料としてだけでなく家畜および野生草食動物の餌として重要な資源の一つと考えられている。これまでアカシアの研究は個々のアカシアの同定といった植物分類学的研究のほか、葉や英の飼料価値、土壌保全さらには薪や炭としての利用といった農林学的な視点からの研究が主体となっており、自然環境とアカシア種の植生との相互関係といった植物生態学的な視点からの研究は極めて少ない。すなわち各アカシア種はどの標高域に優占的なゾーンを形成し、どのような地形と土壌区分に生育し、さらには他のどんな植物と共存しているかといった問題については不明な点が多い。そこでこのプロジェクトではエルゴン山麓からコーストというケニアの北西部から南東部へ縦断する路線、さらにケニア山麓から南西部のマガディ湖までの路線を対象とし、標高の違いによりどの種が優占的な群落をなしているかを調査した。さらに各アカシア種の群落と地形、他の共存植物、土壌といった環境要因との関係を詳細に検討したうえで、アカシア各種の生存戦略について考察した。

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース 第1号

1998年4月30日発行 編集・発行者/足達太郎 発行所/日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

JSPS Research Station, Nairobi, P. O. Box 14958, Nairobi, Kenya

電話+254-2-442424 ファクシ+254-2-442112 電子メール [jsps@swiftkenya.com](mailto:jsps@swiftkenya.com)